侵香

華流羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
侵香

【Ｎコード】
Ｎ９８３０Ｃ

【作者名】
華流羅

【あらすじ】
黒尽くめの男が声を失った人々の中で旅をする。その理由はとても深くて悲しいもの…

第1章

果てる事なんてないって思っていたモノが果てた時
世界が終わって
総てには限りがあるって知ったんだ。
あの日あの時に
世界は終わって
世界が始まった。

第1章　ーコエカクシ　カナリアサガシ　マチツヅケー

皆が忙しく手を動かしている音がする。
『やはり此処もか…』
黒くて少し大きな帽子で顔を隠し、コンパクトで鼻と口が隠れるだけの防塵マスクと黒のトレンチタイプのボタンやジップの山程付いたロングコート、黒の細身のパンツに先の尖った黒のブーツを履き死体でも運べそうなトランクを持った黒尽くめの男は誰に向ける訳でもなく小さく誰かに語るでもなく呟いた。

砂塵舞う街
1つ前の街は森に被われた美しい街だっただけに此処はやけに殺風景に見えてしまうが、世界はあの日大地の8割程度をこうしてしまった。
つまりは普通の姿にすぎないという現実があった。

やはり此処にも話し声は響かない。
皆手振り身振りらしきコミュニケーション方法で会話らしきものをしている。

1人の男が近付いてきた。
荷物を持たせてくれと手振りで伝えてきたが首を横に振り足早にその場を離れた。
旅人達の荷物持ちをして収入を得る
または
そのまま持ち去る
というのがよくある手だ。
自分の命を守るには荷物も命も人に預けてはいけない。
またその逆もしてはならない。
男の右手の親指と人差し指と中指の義指がそれを忘れない様にと警告してくる。

何かの機械音と人の動く音の中を真っ直ぐ延びた道を真っ直ぐ歩く。
物乞いや物売りの類が忙しく寄せては返す中でどれ1つ相手にする事なく只1カ所だけを目指して歩く。

果物や野菜等の露天を幾つか通り過ぎた時に、綺麗ではあるが地面の色と同じ色で壁迄塗られた目立たない、遠くからだと完全に背景に溶け込んでいる店が一軒静かに佇み、看板には『灰色のショップ』とやっと読める位に文字が残る。

『本当にあったんだ』
男は今回は声には出さずに心で呟いた。

店の扉には『只今準備中、この先もずっと準備中』と随分前に書かれた文字の薄くなった札が掛かっていた。
『準備中しかないのか』と今度は誰一人として聞き取る事の出来ない様な小さな声で言う。

暫く扉の前に立つが何か変化のある気配はないので扉をノックする

と、少しの間の後、ドアの下側の隙間から一枚の紙が出てきた。
そこには『金糸雀を待つ者ならば建物の横より裏へ回り再び扉をノックせよ』
と書いてある。

人1人もキツい位の細い路地…というよりは隙間といった感じの場所をやっとの事で躯とトランクを壁に擦る様にしながら通り抜けて裏へ回ると、さっき迄が嘘の様な静けさとなり、眼前の建物にのみ他の建物にはない裏口の様な扉が付いているのが見て取れた。

表の扉よりも更に用心深く古ぼけ忘れられていたであろう扉のすぐ横の壁に体をピタリと寄せ奇襲的な銃撃等に対しての基本姿勢で軽くノックしてみる。
すると、まるで生き返った時に骨が軋む様なギシギシとミシミシの中間の音を立てながらゆっくりと扉が開かれた。
ゆっくりと覗いたショップの内部は薄暗く、マスクをしていなければ埃と黴の馨が酷い事は観ただけで解り、何かを売ろうという意思は一切感じられない。
『攻撃性は感じないな…』と安心すると同時に『防塵マスクは外せないか…』と男は少し残念に思ったが、さほど期待もしていなかったので大したショックはない。

開いた扉の内側に立っていた小柄な男性とも女性ともつかない様な顔を持つ人物に筆談で『金糸雀は此処に?』と訪ねる。
その人物は『店主は二階にいる。この奥の階段で二階に上がればすぐに解る』と筆談にて返事を返す。

両脇にある訳の解らない書物や造形物が置かれた棚の間に偶然出来たのか必然的に出来たのか解らない細い通路の様なショップ内を裏口に回った時と大して変わらない姿勢で大きな変わった形のトラン

クを慎重に引きずり直進して行くと、やがて薄明かりの中に白く浮かび上がるコンクリート製の様な、通路よりも細い階段が現れた。
階段の裏側がどうやら街の方に向けられている扉の様ではあるが、その7割程は階段により塞がれている。
少しだけ見える扉の片鱗部分の下方より紙を出してきたと考えられる。
その階段の先は天井で、行き止まりに見える…
が、よく見ると平面に見える天井が小さなフックや指を一本だけ引っかけられるような形状になっている事に気付く。

男は静かに左手の人差し指を入れ、そっと引く…
が
小さな扉の様なものは全く動かない。
『この形状である以上押すことは考えがたい』と心で想い、右に少しスライドさせる様に力を込めた瞬間に、驚く程あっさりとその蓋の様に見えていた扉は開いた。
少々男が驚き、思考力と判断力が一時停止していると見えない場所から『早ク入ッテクレ』というネジ式の様な声が聞こえる。
その声に更に驚きながらも階段の頂上へと歩を進めると『早ク扉ヲ閉メテクレ』という声がした。
それは紛れもなく、目の前の老人から放たれていた。
上半身だけを起こせるようにリクライニングされた下のショップとは真逆の清潔そうな白いベッドに目を閉じ身を預けていた。
『オ前サンモ、金糸雀ナンダロ？』
と問われ戸惑ったが、男は黙ったまま頷く。
『私モ老イテシマッテ今ハ振音機デシカ話セハシナイガ、金糸雀ダヨ』
と言うと、右手に持つ喉の部分にあてがっていた銀色の小型マイクの様な物を少しこちらに見せた。
そして、

『私ハアノ時不思議ト目ヲ持ッテ行カレテ、コウシテ声ハ遺リ金糸雀ニナッタ』
とも付け加えた。
老人は防塵マスクをしていない。
此処場所ではどうやらマスクは要らないらしい。
そう悟り外そうとした時に
『止メタ方ガ良イ、弱クハナッテイルトハ言エ安全デハナイ』
と老人が止めに入り男は留まった。
『名前ハ？』
と聞かれ、男は戸惑った表情の後に
『…文鳥…』
と出し方さえ忘れそうになる声で答えた。
『…貴方は？』
と聞き返すと老人は
『鶺鴒ト呼ンデクレ』
と答えた。

鶺鴒は初老で、白髪の髪が少し長めで、閉じた目は切れ長気味で、その風貌は若い頃は女性には困らなかったに違いないと感じさせるに充分な程である。

砂礫の街を離れて…

○●○●

『オ前サンガアノ時ニ何ヲ失ッタノカ等ハドウデモヨイ。大切ナノハ何ガ残リ何ヲ得タカナノダカラ』
と文鳥と名乗る男に告げ、
『シカシ、視界ヲ失ッタ時ハ諦メカケタガ、ソレデモ今デハオ前サンガ何処ニ居テドンナ表情ナノカサエ解ッテシマウ』
と、続けた。

文鳥が不思議そうな表情を浮かべていると、鶺鴒が軽く笑った後に
『不思議ソウナ顔ヲシテイルナ？目ナド見エヤシナイガ、視界等ハ感覚ノ補助ニ過ギナイ。ソシテソレハ時ニ邪魔ニサエナル。空気ノ流レヤ、雰囲気ト呼バレルモノヲ第六感ヲ通ジ感ジルニハ邪魔ナダケナンダ。』
と言うのを聞き終わると被せる様にして
『…他の金糸雀について何か知っている事は…？』
と問う。

『残念ナガラ詳シクハ知ランガ風ノ便リニヨレバ、此ノ世界ニハ金糸雀ト呼バレルモノガ少ナクテモ5人ハ居ルト言ウ。此処ニ2人居ルトイウ事ハ後3人居ル。』
と、言うと顔を持ち上げ文鳥の方を瞳を閉じたまま見つめた。
正確には文鳥が見つめられていると感じた。
『世界ガコンナ姿ニナッタ後ニ一度ダケ金糸雀ニ逢ッタ事ガアル。』
過去を探る様に鶺鴒が想いを巡らしていくのが見て取れたので問いたい気持ちを抑えて文鳥は待っていた。
『オ前サンハ「朱ノ砦」ト呼バレル街ヲ知ッテイルカナ？』

文鳥が首を振る間もなく鶺鴒は語る。
『コノ街ヲ抜ケタラバ、陽ノ沈ミユク方向ヘト向カエ。遠クハアルガ、ソノ街ガ今ノオ前サンガ辿リ着ケル唯一ノ場所ダカラ。此ノ場デ学ンダ事ヲ忘レナケレバ大丈夫ダロウ。』
と、言った。
何を学んだのか見当もつかない文鳥に
『人ガ人ニ出逢ウ事ハ何カヲ得ル事。金糸雀ガ金糸雀ニ出逢ウ事ハソレ以上ニ、何カヲ学ビ羽根ヲ紡グ事。忘レルデナイ。オ前サンガ此処デ何ヲ得テイルノカ？ハ何レ嫌デモ解ル。』

気付かなかったが、鶺鴒の言葉に耳を傾ける内に随分な時間が過ぎていた様で、陽も大分傾いてきていた。
四方に窓があるこの部屋では太陽の動きが手に取る様に解る。
どうやら鶺鴒は頭を北に脚を南にして寝ているらしかった。

文鳥が深く頭を下げ床にある扉に手をのばそうとした瞬間に床の扉が自動的にスライドし開く。
文鳥が驚き戸惑っていると、その扉からマスクをしていない女性が1人上がってきた。

歳の頃は文鳥と変わらない位、この国の人達よりもうっすらと黒い肌色をした目鼻立ちのはっきりとした端正な顔をした女性。美しい姿をしている。

文鳥に向かい軽い会釈をすると扉をゆっくりと閉じた後に、折り畳まれたビニールシートの様な物体を床に置き掌に乗りそうな機械をその傍らに置いた。
その機械は、大きさの割には大きなモーターの様な音をさせ始め、その瞬間一気にビニールシートの様な物体が膨らむと簡易のベッドが出来上がった。

その光景を初めて観る文鳥は呆気にとられていたが、その表情を観て女性が美しく微笑んだ。が、その笑みに声はない。

『孫ノ揚羽ダ。金糸雀デハ無イカラ声ヲ出ス事ハ叶ワナイ。ダガ、気ノ利ク良イ子ジャゾ。』

と、割れた音声で笑う。

『今日ハ陽ノ堕チ逝ク方向ダケヲ良ク確認シテオケ。夜明ケ迄休ミ出発シタラ良イ。』

その言葉に甘える事にして、文鳥は

『ありがたい。明日朝迄此処に居させて貰う。』

というと、声無く揚羽が又微笑む。

大きなトランクを横たえ中を開ける必要はないままに、昼間とは打って変わる静寂の中静かに月を見つめながら眠りについた。

第2章ーホロビユク　サイゴノイノリ　ユリノハナー（前書き）

第2章ーホロビユク　サイゴノイノリ　ユリノハナー

第2章ーホロビユク　サイゴノイノリ　ユリノハナー

第2章ーホロビユク　サイゴノイノリ　ユリノハナー

朝陽が昇るより先に文鳥は目を醒まして、窓から星々を見送りながら朝陽を待っていた。
月が顔を隠し朝陽が目覚める時、人の喧騒や街の雑踏も消え、自分の声だけが世界中で唯一の音だと確かめる様に呟く。
『ティエス　フィッツ　ヴァルーニ』
小さな頃、今は亡き母が毎朝呟く言葉。
何という意味なのかも、何処の言葉なのかも、全く知らない不思議な響き。
それでも、母の遠い想い出の中の温もりに近付ける瞬間であるという理由から文鳥は毎日月が沈み太陽が昇る前の一瞬の時間に祈る様に唱える。

昔人間が信じていたという宗教という、全知全能妄想を抱いた人間が集まり肩を寄せ合い壊れそうな運命を分かち合うものと似ているのかもしれない。

陽が昇り始めた時に鶺鴒の機械仕掛けの声が響く。
『オハヨウ文鳥。』
という声に少々驚き、同時にさっきの言葉を聞かれていたらと考えると何故か少し気恥ずかしい気がしたものの平静を装って鶺鴒に目を落として
『起こしたのならすまない。』
と、伝えた。
鶺鴒は文鳥の方を向き（見えてはいない筈だが）微笑みながら
『随分ト早イ様ダガ眠レ無カッタノカ？』

と、問うので文鳥は鶺鴒の閉じている瞳を見詰めたまま首を横に振り、もう行くのか？と問われ文鳥は首を上下する。
『陽ノ沈ミ逝ク方角へ』
その言葉を背に文鳥は床の扉を横にスライドさせて開き下の狭いショップへと大きなトランクと共に降りた。
そこは相変わらずマスクをしていなければかなり浸食されていそうな狭い通路しかないショップ内。
その唯一の通路をトランクを物にぶつけない様に出口に向かって慎重に歩き出したその時に、扉の前に立つ人影に気付く。
ふと伏し目がちにしていた目を真っ直ぐに向けると鶺鴒の孫にあたる揚羽が立っている。昨日見かけた時と変わらずに端正な美しい容姿をしたままに。
揚羽は綺麗に折り畳まれたこの街の何処のショップでもなかなか高価な値段がしそうな美しい観た事のない動物の絵が透かしになっている紙を文鳥に向け差し出し美しく微笑んでいる。
そこには
「どうか金糸雀の皆様にお会いになりましたら再びこの鶺鴒のショップに必ずお立ち寄り下さい。鶺鴒も私も何時迄も心よりお待ちしております。」
と描いてあった。
その文章から離れた場所に
「どうか命だけは御落とさない事だけを祈っています」
とも描かれてある。

文鳥は
『ありがとう。鶺鴒にも世話になったと伝えて欲しい』
と告げ、揚羽が躯を退かした後ろにある扉をミシミシとギシギシの中間の音を響かせながら開き、朝焼けに焦げ始めた街へと振り返る事なく歩みを進めた。

街は未だに眠りについているかの様で、ショップも大半は閉まっており、時折散歩らしき人々が行き交う程度。
陽当たりの良い場所で座っていた人影が文鳥を見て一目散に近付いてくると身振り手振りで何かを伝える。
どうやら街を出る辺り迄荷物を持ちたいと言っている様だったが、勿論断った。

砂埃舞う荒れた街の中央に位置する大通りを、街に入った場所を背にしながら大きなトランクと共に真っ直ぐと突き進む。
ただ真っ直ぐに、何が見える訳でもない場所を目指して、何が待つか解らない場所へと向かう。

身振り手振りで何かを伝えるマスクをしていない沢山の物乞いや物売りを交わして辿り着いた街の終着点。そこで文鳥はマスクの中で深く息を吸い込み、吐き出す。そしてもう一度、さっきより小さく吸った息を吐き出す時に『さようなら。そして、ありがとう』と、やはり振り返る事なく声に出し、陽の昇った方向を確認して、まるで後光がさすかの如く背にしながら、追い付く事のない自分の影を追いかける様に歩き出す。

荒廃した殺伐とした風景が永遠であるかの様に視界が届く範囲に続いている。振り返りさえすればきっとそこには鶺鴒や揚羽の住む街が未だ観えるだろうが、文鳥は其れを決してしようとはせず、ただ金色の砂と岩だけしか見えない。

黒くて少し大きな帽子で顔を隠し、コンパクトで鼻と口が隠れるだけの防塵マスクと黒のトレンチタイプのボタンやジップの山程付いたロングコート、手には肘のやや下迄かくれる皮の手袋をして、黒の細身のパンツに先の尖った黒のブーツを履き死体でも運べそうなトランクを持った黒尽くめの男が前だけを見続けて歩く。

時折強く吹く風は砂を浚い、あの日から岩を削り、平坦な道なき大地を創り、まるで時間迄を歪めたのかもしれない。

何度自分の影が新しく産まれたのか？文鳥は既に喉の渇きに限界が来ていた。

持っていた水さえももう残りはほぼ無い様な状態で、今は何より水が欲しかった、喉を潤してくれる物が…

何とか歩みを進めて行くと一面金色の砂と岩しか無いキャンバスの彼方に小さな緑色のインクが堕ちている…

『緑…』

声に出さずに文鳥は頭の中で自分に言う。

『幻か？』

更に同じ様に自分に問う。

もう既にこの金色以外の色が世界にある事を忘れてしまうには余りに充分過ぎる時間が流れている様に感じていた。

しかし、何も頼れる情報等はないのだから、ただただ鶺鴒の言った陽の沈み逝く方角だけを必死に目指し歩んでいる。

遠くの緑のインクが1歩1歩と歩く度に少しずつ近付いて来ている。緑が木々だと認識が出来る位になると、そこには今や懐かしささえも感じる揺らめきを秘めた水がある事を視覚に捉えるのも容易だった。

蜃気楼では無い事は確かだった。

此処は風景としては蜃気楼が出てもおかしくはなさそうな景色ではあるが、実際空気を屈折させるだけの気温の上昇はなく、陽炎さえも出る事はない。

文鳥は迷う事なく、ただ一心にその緑と水を目指し、少し早足になる様に足場の良いとは言えない砂地を急いでいく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9830c/

侵香

2011年1月20日14時29分発行